

創作者としての濱田庄司 —「民藝作家」再考—

よしかわ あゆか

吉河 歩香 (学習院大学)

発表要旨

10
時
40
分
—
11
時
20
分松
ヶ
崎
・
西
キ
ャ
ン
パ
ス
内
セ
ン
タ
ー
ホ
ール

濱田庄司(1894-1978)は、民藝運動の中心人物として知られる近現代の陶芸家である。

これまで濱田についての言説は、「民藝思想」に重きを置いた観点と、各種展覧会の出品作品によって構築されてきた美術史的観点の、大きく2つの側面から成されてきた。とくに作陶家としての濱田は、今日までいわゆる「民藝作家」として評価されてきたものの、一方で近現代の陶芸家としては等閑視され、美術史的俎上には載せられてこなかったと考えられる。

そこで本発表では、濱田の作品について美術史的観点から捉え直し、近現代陶芸家として新たな位置づけを行うことを目的とする。とりわけ、古陶磁からの古典学習の足跡を追っていき、濱田が実見した作品と濱田作品とを比較することでイメージソースを追究し、濱田庄司の近現代陶磁史における新たな「陶芸家」としての濱田像を提示したい。

濱田が陶芸家としての第一歩を踏み出した大正初期、辛亥革命を機に勃発した清朝の瓦解によって、世界は空前の中国古陶磁器ブームが巻き起こっていた。とりわけこの中国陶磁を受容したのはイギリス人で、大量の中国陶磁の優品がイギリスへと運ばれていった。濱田は大正5年、当時日本国内で最先端の陶磁器技術研究が行われていた京都市立陶磁器試験場に就職し、釉薬や成形の研究修練に励んでいた。濱田は試験場の先輩、小森忍を訪ねて大正8年に大連を訪れ、さらに朝鮮にも足をのばす。また、大正9年にはイギリスへ渡り、およそ3年間英国にて作陶を行った。この間、濱田は中国陶磁の大コレクター、ユーモルフオプロスに面会し、彼のコレクションを実見している。その後大正13年、各国を経由して帰国、その年の年末には益子へ入り、間もなく沖縄壺屋窯で作陶を行った。昭和2年には東北・山陰・九州の民藝品調査の旅を柳宗悦、河井寛次郎らと共に行っている。

このように濱田は各地を訪れて、様々な作品を目の当たりにしたが、濱田が実見した古陶磁と、濱田作品とを比較していくと、それらからの影響がうかがえる濱田作品が多数散見された。とりわけ濱田は、中国古陶磁の「宋磁」や「呉須赤絵」のような、当時流行した陶磁器をモデルに、そこから様々な要素を果敢に自らの作品に盛り込んでいた。さらに造形意匠のみならず、現地の窯場を見学することで技法をも習得し、作品制作に生かしている。富本憲吉や石黒宗磨など、同時代の陶芸家と比較しても、彼ほど国内外を問わず各地を訪れ、現地で作陶を行い、幅広い文物に触れた人物は稀有である。

多くの土地を訪れていたがためにそのイメージソースは幅広く、ゆえに濱田作品は多様な造形意匠を見せている。濱田は、いち早く流行を感知し、人々のニーズにこたえつつ、魅力的な意匠を次々に創作する、まさにアーティストと呼ぶにふさわしい、美的感覚に秀でた人物であったのだ。